

援助職のリカバリー

《20》

～「セックスレス」に立ち向かう(1)～

袴田 洋子

京子は、47歳。同じ年の夫・弘明と二人暮らし。共に暮らして18年になる。子どもには恵まれなかったが、それでいいと思っていた。世の中、子どもがいない夫婦はたくさんいる。子どもがいなくても、いないなりに幸せに暮らしている夫婦は、大勢いる。まるで自分に言い聞かせているような自分の言葉に、ふと引っかかった。「幸せに暮らしている」夫婦。「私は幸せに暮らしている、のだろうか？」どうしても誤魔化しきれないとある事柄が、京子の胸の奥からじわりと広がっていった。京子と弘明は、結婚後まもなくセックスレスになり、18年が経過していた。

弘明は、一部上場企業のサラリーマンで、結婚当初から、帰宅は毎晩22時半過ぎだった。ノー残業デーの水曜日には、18時半頃に帰ってくるが、

5年ほど前に管理職になってからは、残業時間の制限がなくなり、帰宅は、毎晩23時近くになっていた。京子は、大学卒業後、薬剤師として大学病院に勤めた。順調にキャリアを積んでいた28歳の時、通っていたテニスサークルの仲間から弘明を紹介された。「結婚適齢期」に逆らうことなく、京子が、弘明の職場近くの調剤薬局に転職するという形で新婚生活が始まった。調剤薬局は、自宅から自転車で10分ほどの距離にある。地域で長年診療しているクリニックの院外処方薬局として、毎日、多くの患者が訪れていた。高齢社会の到来に伴い、京子達薬剤師も在宅療養の年寄りの自宅に訪問するようになり、目が回るほど忙しい毎日だが、専門職として使命感を持って働いていた。

「少子高齢化」がテレビで頻繁に言

われるようになった頃、京子は、子どもがいないことにバツの悪い思いを感じていた。子どもがいなくても構わないという、開き直るような思いとは裏腹に、社会的な問題に自分が加担している罪悪感があった。そして、同じ頃、少子化の原因とも報じられた「セックスレス」という言葉に、他人事ではない思いが生じていた。

セックスレスは、「病気など特別な事情がないのに、カップルの合意した性交あるいはセクシュアル・コンタクトが1カ月以上ないこと」と定義されている。と考えると、自分たち夫婦は、紛れもないセックスレスだ。何しろ結婚して約18年もの間、途中、やっぱり子どもを持ちたいと考えて、排卵日に合わせてセックスした以外、全くしていない。でも、それでも何も不自由は感じていない。別にしたいとも思わない。よその夫婦は、それなりにセックスをしているのかもしれないが、うちは夫も求めて来ないし、私も求めないし、だから何も問題がない。夜は、性欲より、もうただ寝たい。そんな風に考えていた。それが、一変した。京子が更年期障害で、体調不良を感じ始めたことがきっかけだった。

京子が45歳の頃、生理が遅れがちになった。同時に、不眠に悩まされるようになった。夜は熟眠感が得られず、

日中は集中力が保てず、仕事がこれまでと同じように出来なくなったように感じた。少し早いかもしれないが、職業柄、すぐに更年期かもしれないと思った。婦人科で検査を受けたところ、女性の医師から「血液データ、女性ホルモンの数値結果からみて、更年期、と言ってよいと思います」と言われた。京子に言いにくそうに伝える女性医師の態度が、余計に京子を落ち込ませた。「ああ、もう女、ではないんだ」と思うと、医療の専門職であり、そのあたりの情報や知識は多く持っているとは言え、やはりショックだった。

体調不良の原因が、更年期障害であることらしいとわかり、京子は、近所の心療内科も受診することにした。更年期障害の自律神経失調症のような症状には、デパスが有効、ということを知り、インターネットで何度も目にしたからだ。最寄りの心療内科のロコミを調べて、電話予約をした。職業柄、よっぽどひどい応対だと感じない限りは、「どこの医療機関も忙しくて大変なのだから」と思うようになっていたが、ロコミどおり、受付も医師も、親切で丁寧な対応だった。不眠に対する治療として、予想どおり、デパスが処方された。果たして、不眠は劇的に解消された。しかし、よく眠れるようになったものの、更年期障害特有の、突然に多量の汗をかくホットフラッシュ

ュや集中力の低下は、ほとんど改善されなかった。「このまま、確実に老いていくのだ」と考えると、どうしようもない喪失感と焦燥感に襲われた。鬱っぽくなってしまうのも、更年期障害のひとつだと考え、とにかく一日一日を乗り切るように、過ごすようになった。

薬局の同僚たちも、京子の体調を気遣い、先輩は励ましてくれた。「いつかは終わるから大丈夫。あと 10 年でスッキリするから！」という励ましになっているのかいないのかわからないようなことを言われ、大笑い出来ることは、有難いことだった。そんな女たちの豪快な話に、やや困惑したような顔をしながらも穏やかに聞いている古川は、薬局内で一番若い男性職員だ。若いと言っても、京子から見たら若いのであって、4 歳になる子どもがいる 32 歳の父親だ。そのソフトな話し方と謙虚な態度は、年寄りに限らず、どの患者からも評判だった。京子は、古川の仕事ぶりに、いつも感心していた。

そんな古川が、昼休み休憩に入った際、嬉しそうにスマホの写真を皆に見せた。「二人目が生まれました！」と言うその手元の画面には、産着に包まれた赤ら顔の新生児が写っていた。京子は、衝撃を受けた。子どもが生まれ

たってことは、セックスをしたと言うことだ！あの、真面目な、シャイな、イヤラシイことなど微塵も考えないような古川さんが、セックスをしたと言うことか！あの古川さんにも、性欲があるのか！と真剣に驚き、混乱した。謙虚な、真面目な、シャイな人でも、性欲がある。京子は、改めて自分の性欲について、考え込んだ。「私の性欲って、どうなっているのだろうか？」